

教室の悪魔

「お前、キモイんだよ！」小学生の時に言われ続けた言葉です。「ダメガネ」「触んな」その他にも多くの心無い言葉を浴びせられました。私は、いじめられていると感じ、辛かったです。しかし、一見ふざけ合いのようにも見えるために、他の人にこの苦しみは理解してもらえませんでした。「ダサイ」

「オドオドしている」これは、私が今大学で言われている言葉です。しかし、これを私はいじめとっていません。なぜなのでしょう？それは、私が信頼できる人に出会えたから、そして、私自身が変われたからです。私のいじめの捉え方が変わったのです。だからこそ、今、私は自分がいじめられているとは思っておらず、苦しんでもいません。しかし、世の中にはいじめで苦しんでいる子ども達が数多くいるのです。

いじめと聞いて、皆さんは何を思い浮かべますか？暴行、恐喝、使い走り、仲間外れ、冷やかかし…。様々なものがあるでしょう。しかし、実際には、「冷やかしやからかい、悪口」がいじめの7割近くを占めているのです。周囲が気付きにくい、そんな何気ない行為がいじめの大半なのです。

いじめの苦しみは2つあります。1つ目は、いじめそのものを感じる苦しみです。2つ目はいじめられた時にその苦痛を他の人に理解してもらえない苦しみです。例えば、ある子どもが悪口を言われたとします。悪口を言われたことによる心理的な苦痛が1つ目の苦しみです。そして、そのことを他人に相談できない、または相談してもその苦痛を理解してもらえない時に感じるのが

2つ目の苦しみです。いじめ自体は根絶することはできません。しかし、いじめが起きた後、他の人に理解してもらおうことでいじめによる苦しみはなくせるのです。そのためには、自分の苦しみを理解してくれる、信頼できる人と関わることや、その信頼関係による本人のいじめの捉え方が変わることが必要です。本弁論の目的は、いじめによる苦しみをなくし、子ども達が安心できるようにすることです。

いじめの多くが何気ない行為です。しかし、その段階でいじめを止められなければ、いじめはどんどんエスカレートします。最初はただのからかいだった、それが軽い暴力に、やがてはさらに激しい暴力や恐喝などにも発展するのです。だからこそ、いじめには早期の発見と早期の対応が非常に重

要なのです！

では、いじめの発見や、相談の実体はどのようなものなのでしょう？現在、いじめへの対策として、スクールカウンセラーが設置されています。しかし、それは十分に機能しきれてはいません。子ども・若者白書によると、平成23年度にいじめの相談を「スクールカウンセラー」にしたいじめの被害者は全体の4.6%に過ぎませんでした。また、平成23年度におけるいじめ発見のきっかけを項目別に見ると、「スクールカウンセラーが発見」の項目の割合は全体のたった0.3%でした。子ども達に日常的に接していない人間では、いじめの対応に限界があるのです。では、いじめの相談を受け、また、発見しているのはいったい誰なのでしょう？それは、担任なのです。先ほどの子ども・若者白書によれば、いじめを「担任」

に相談した割合は 7 割近くもあり、全体で最も高いのです。また、いじめ発見のきっかけを項目別に見ると、最も高い割合だったのは「担任によるアンケート調査」、2 番目に高かったのは「被害者本人による担任への申告」、3 番目に高かったのは「担任の発見」でした。上位 3 項目に担任が関わっています。つまり、いじめの早期発見・早期対応には担任の働きが非常に大きいのです！

このように、スクールカウンセラーのような身近ではない存在は、子ども達にとって必要とされていません。皆さんは自分がいじめられた時、どこの誰とも分からない人に相談しようと思いますか？学校の子ども達も同じです。相談相手が身近な人だからこそ、相談すれば自分のことを分かってくれるかもしれない、この苦しみを何とか

してくれるかもしれない、子ども達はそんな期待が持てるのです。身近ではない人に対してはそんな期待は持てません。

担任がいじめを発見し、相談を受けている。しかし、その対応はあまりにも不十分なのです。いじめ被害全体の中で、いじめを「先生はなくそうとした」割合が4割しかないのに対し、いじめを「先生は上手く対応できていない」割合の合計は6割もあります。実に、半分以上の割合で教師はいじめに適切に対応できてはいないのです！

では、なぜ、教師はいじめに対して上手く対応できていないのでしょうか？1つ目の原因に、教師のいじめ対応のスキル不足が挙げられます。いじめには、複雑な心の問題が絡んでいます。その対応には十分なスキルが必要です。具体的には、子どもが相

談しやすい雰囲気作りや子どもを傷つけない反応をすることです。しかし、教師は心の専門家ではありません。いじめ対応に求められるスキルを全ての教師が身につけられていないことで、子ども達が満足いく対応がなされていないのです。

2つ目は、教師の多忙さです。7割の教師がいじめに上手く対応できない理由に「時間不足」を挙げています。授業に加え、事務作業、保護者対応など教師は多くの仕事を抱えています。実際に、教師は月50時間も残業をしています。これでは、一人ひとりの子どもに割く時間は少なくなり、いじめへの十分な対応ができなくなります。

以上のような原因に対して、私が打ち出す政策は2点です！1つ目がCAPプログラ

ムの拡充、2つ目が事務員を増加して校務を減らすことによる教師の負担軽減です。

まずは、CAP プログラムについてです。CAP とは、Child Assault Prevention、子どもへの暴力防止という意味です。子どもをいじめから救うためにアメリカで生み出されたプログラムです。アメリカの公教育の7割で授業に取り入れられており、日本でも一部のNPOが既に取り組んでいます。子ども用プログラムと大人用プログラムがあり、それらをセットで行います。

子ども用プログラムでは、ロールプレイング等でいじめにあったときに、大人に助けを求めることを促したり、また、どのように自分の身を守ればいいのかなどを子ども達に教えたりします。しかし、子ども達への指導だけでは不十分です。なぜなら、プ

プログラムによって子ども達が大人に相談するようになっても大人が対応の方法を知らなければ子ども達を救うことができないからです。

そこで、**CAP**プログラムでは子ども用プログラムとセットで大人用プログラムを行います。大人用プログラムでは、子どもから相談を受けた時にどう対応すべきか、具体的には子どもの気持ちに配慮した反応のしかたや子どもの不安を和らげる話し方などを教師などの大人に教えていきます。単に教師に話を聞かせるのではなく、子ども用プログラムと同じようにロールプレイング等を通じて積極的な参加体験型学習を促していきます。

ある小学校における、**CAP**プログラムの成功例があります。1人の児童がクラスメイトに悪口を言われていました。その児童は

自分がどう行動すればよいか分からず、誰にも相談できずにいました。しかし、CAPプログラムを通じて1人で抱え込むことこそがいけないことだということを知り、担任に悪口のことを相談できるようになりました。担任の方もCAPプログラムによって適切な対応のしかたを身につけており、児童のアフターケアを行うことができたのです。

CAPプログラムによって、いじめが起きた時に子ども達は大人に相談できるようになり、大人はそれにしっかりと対応ができるようになるのです！

2つ目の教員の負担軽減についてです。具体的には、事務員を増やして教師が負担する校務を減らします。教師が多忙である原因に事務作業の多さが挙げられます。例え

ば、学校のホームページの更新や教材の発注、教材費や給食費の管理などです。日本の教師は一週間で平均 5.5 時間を事務作業に費やしているのです。これでは、教師が子ども達と向き合う時間が十分に取れません。事務員を増加することで、これらの時間を浮かせ、教師が子どもと接する時間をとれるようにします。熊本県のある中学校では、この政策により、41 人もいたいじめによる不登校の生徒が 2 人にまで減少しました。このことから、教師が子どもと向き合う時間をつくることはいじめの対策に非常に有効であることがわかります。

いじめは、誰にでも起こり得るものです。今もどこかにいじめで苦しんでいる子どもがいます。そして、これからいじめで苦しむであろう子どももいます。しかし、周囲の働きかけで、誰の隣にもいる教室の悪魔

から子ども達を救うことはできるのです！

ご清聴ありがとうございました。